

一八八四年四月五日(土)

ドツキネーシヨル  
南神村において、プランクリシユナ、校長をはじめとする信者たちと共に

聖ラーマクリシユナと校長、ラーム、ギリンドラ、ゴパール

今日は土曜日、チヨイトロ月二十四日、英国流にはキリスト暦一八八四年四月五日、午前八時ころ。校長がセツキネーシヨル南神寺院に着いてみると、聖ラーマクリシユナはニコニコしながら自室の小ベッドの上に乗っておられる。床には数人の信者が坐っていた。そのなかにプランクリシユナ・ムコパツダエがいる。プランクリシユナは誇り高きジャナイのムコパツダエ家の一員である。カルカッタのシャームブルに家があり、エクスチェンジと呼ばれるマッケンジー・ラヤル競売場の支配人をしている。在家ではあるがヴェーダーンタの研究に大きな喜びを感じ、バラムハシヤ・デーヴァ大覚者様の熱心な信者であつて、時々ここへお目にかかりに来るのであつた。しばらく以前に自分の邸にタクールをお招きして、盛大なお祭りをしたこともある。バグバザールの沐浴場ガートで毎日、早朝のガンガー聖水沐浴を欠かさない。そして舟の都合がいいときは必ず、ドツキネーシヨル南神村に来てタクールにお会いするのだつた。今日も例によつて舟を借りて来たのである。舟が岸から離れると急に大波が立つたので、いっしょに乗っていた校長は怖おじ気づい

て、舟から下ろしてくるようにと言った。ブランクリシュナと彼の友人たちは、大丈夫だからと言つて引き止めたが、校長は、「下ろして下さい。私は歩いて行きますから——」と主張してきかない。仕方なくブランクリシュナは彼を岸に下ろした。

校長が寺に着いてみると、ブランクリシュナたちはしばらく前に既に到着していて、いとも楽しげにタクールと会話をしているのだった。タクールに額ずいてご挨拶をし、横に坐つた。

〔アヴァターラについて——人間と神の化身〕

聖ラーマクリシュナ（ブランクリシュナに向かつて）けれども、あの御方は人間に一番よく現れていなさるんだよ。すべての生き物並みに飢えも渴きもするし、その上、怒ったり悲しんだりする人間などに、どうして神が化身しなさるのか、と言うかも知れん。その答えはこうだ——五元素のワナにとらえられ、ブラフマンさえも悶え泣く。

ほら、ラーマだつてシーターのためにどんなに苦しみ悩んで涙を流されたことか。それに、ヒラニヤークシャを滅ぼすために神は牝豚に化身なすつた。ヒラニヤークシャを殺しても、ナーラーヤナ大神は天国にお帰りにならない。牝豚になりきつていらつしやる。何匹かの仔豚も産んだ。仔豚たちといつしよに楽しく暮らしていなすつた。天の神々は口々に、『どうしたのだらう。タクールがお帰りにならないとは——』と言つたあげく、皆してシヴァのところに行き状況を説明なすつた！ シヴァ大神は行つてナーラーヤナ大神に強い口調で帰ることをすすめたが、その方は仔豚に乳をやりながら

動かない(一同笑う)。やむなくシヴァは、三叉のヤリで牝豚の体を刺し殺しなすった。タクールはヒーヒー大笑いしながら天国にお帰りになった」

ブランクリシユナ「(タクールに向かつて)先生！ マハシヤイ アナハタの音というのは何でございますか？」

聖ラーマクリシユナ「アナハタの音は、いつも自然にひびいてるんだ。プラナヴァ(オーム)のひびきだよ！ 至上梵パラブラフマンからくる音で、ヨーギーたちは聞こえるんだ。俗っ気の強い人間には聞こえない。ヨーギーたちはこの音が、自分のヘソから発していること、そして又、あのミルクの海(大原因の海)に在る至上梵パラブラフマンから発しているのを知っている」(訳註——インド神話によると、神の創造の一つの周期が終わったあと、次の周期に移るまでの間、ミルクの海(大原因の海)に安らぐとされている)

〔死後に関するケーシヤブ・センの質問〕

ブランクリシユナ「先生、私どもの死後はいったいどうなるのでございましょうか？」

聖ラーマクリシユナ「ケーシヤブ・センも同じ質問をしたっけ。人間が無智でいる間は、つまり神をつかまないうちは生まれ更かわるさ。けれども、真実の智識を得たならば、二度とこの世にやっ来なくていい。地球やそのほかのどんな世界にも、行く必要はないんだよ。

陶器を作る人は、壺を日なたに並べて乾かしているがね、その中によく乾き上がった壺と、まだ湿った壺があるのに気がつかないかね？ 牛やなんかがやってきて、踏みつけてコナゴナにしてしまうことがある。乾いた壺がこわれると、職人はそのカケラを全部捨ててしまう。もう役に立たないからね。

湿ったツボがこわれると、そのカケラをとっておく。寄せ集めて決まった目方の塊にして、新しい壺をつくるんだ。そういう具合に、神をつかまさないうちは陶器作りの手に戻らなけりやならない。つまり、この世に繰り返し繰り返して来なくてはならない。

炊いた米を撒いたってどうなる？ 芽が出ないだろう。人が智慧の火で完全に炊き上がってしまったら、その人を通じて新しい創造は行われぬ。その人は解脱してしまっただからね」

〔ヴェーダーンタと我念——ヴェーダーンタと三つの状態の目撃者——智と大智（ウヂユニヤト 覚智）〕

「プラーナによると、信者と神は別なもの。私は一つのもの、お前も一つのもの。肉体は皿のようなもの——この肉体のなかに、心、知性、我念という水が入っている。プラフマンは太陽のようなもの。その御方はこの水に映っていなさる。だから信者は、神の姿を見るんだ。

ヴェーダーンタ（ヴェーダーンタ哲学）によると、プラフマンだけが実在、実体で、ほかはすべてマヤー、つまり夢まぼろしのような、一時あるように見えてもその実無いものだという。

我々とかたちのかたちの棒切れが、サッチダーナンダの大海の真ん中あたりに浮いている。（校長に向かって）お前、これよく聞いておくんだよ。——我々の棒切れをとってしまえば、ただ一つのサッチダーナンダ大海だ。我々の棒切れがある間は二つの部分に見えて、こっちの部分の水とあっちの部分の水があるように見える。プラフマン智が生じれば三昧に入る。そうすると、この我々がきれいになる。

だが、人々を導くために、シヤンカラアーチャーリヤ大師クワイヂイヤーは、明智の私アミを残しておきなすった。

(プランクリシユナに向かつて)智者には特徴しるしがあるんだよ。ある人たちは、自分は智者なんだと思っているがね。智者の特徴しるしはどんなものだろうか？ 智者はどんな人をも傷つけることはできない。子供のようになってしまう。ハガネの剣は賢者の玉にふれると、ハガネが金に変わってしまう。黄金では切ることができない。外から見れば怒りがあつたり我執のようなものがあるかのように見えても、実際には智者はそういうものを少しも持っていない。

遠くから焼けた繩を見たら、ちゃんとした繩が落ちてるように思うことだろう。だが、そばにいつてプーッと吹けば、みんな飛び散ってしまうよ。見せかけだけの怒り、見せかけだけの我執で、ほんとの怒りもないし我執もないんだよ。

子供には執着がない。積木の家を建てたところへ誰かが来て手でさわると、イヤーン、イヤーンと身をよじらせて泣き叫ぶ。と思うとすぐ、自分からその積木の家を跡形もなく壊してしまう。こんどは自分の持つてる布切れにえらく執心しているように見える。これはパパが買ってくれたの。誰にもやらないよ。なんて言っているが、ちよいとした人形を一つ持たせてやれば、すっかり布切れのことは忘れてしまつて、放り出したままあつちへ行くさ！

こういうのが智者の特徴しるしだ。大そうな邸宅に住んで、ぜいたくなベットや椅子や絵だの馬車だのがあるかもしれない。だが、またそれを全部捨てて、いつでもカーシー(ベナレス)に行つてしまふだろう。ヴェーダーンタによれば、目覚めている状態も、ほんとは何もないのだと言う。一人の木こりが夢

をみていた。ある人が眠りを覚ますと、木こりは真つ赤になって怒り立ち上がった。『お前、なぜおれの夢を覚ました？ おれは王様になって、七人の王子の父親になっていたんだぞ！ 王子たちは皆、学問も武術もよく仕込んだ。おれは獅子の座に坐って王国を支配していた。お前、どういふわけでおれの幸福な生活を壊してくれたんだ？』その人は、『だって、そりゃ夢じゃないか。何でもないじゃないか』と言ったら木こりは、『間抜け！ お前は何もわかつちやいないのか、おれが木こりでいるのが本当のように、夢で王様になったのも本当なんだ。木こりでいるのが本当なら、夢で王様になったのも本当（実在）なんだ』

ブランクリシュナは始終、智識、智識と言っているので、タクールはほんとうの智者の境地というものをお話して下すたのである。こんどは、タクールは覚者の境地をお話して下さる。これによってご自分の境地を暗示なさるおつもりであろうか？

聖ラーマクリシュナ「ネーティ、ネーティ（これでもない、これでもない）と否定していつて、真我をつかむのが智識だ。ネーティ、ネーティと分別判断しつくしたあげく、三昧に入つて真我を覚るんだよ。

ところがその上に、真理とピツタリ一枚になった智慧がある。これが覚智だ。ある人は牛乳のことを聞く。ある人は牛乳を見る。ある人は牛乳を飲む。聞いただけの人はまだ無智。見た人は智者。飲んだ人が覚者。つまり、それを自分のものにするのが出来たんだ。神を見、神と語る——最も親しい間柄のように。これを覚者と名付けるんだよ。

はじめのうちは、ネーティ、ネーティとやらなけりやいけないよ！ あの御方は五元素（地、水、火、

風、虚空<sup>ソラ</sup>ではない。感覚器官ではない。心でも知性でも我念でもない。あの御方はあらゆるものを超越している。屋根に上るには階段を一段一段と足を放しながら登っていかなければならん。どんなに高いところの段だつて、屋根じゃないんだからね。けれど、いざ屋根の上上がつてみると、屋根の材料である煉瓦や石灰が——それと同じ材料<sup>もの</sup>で階段も出来ているんだということがわかる。至上梵そ<sup>パラブラマン</sup>のものが、この生物世界、二十四の存在原理になつていなさるんだ。真我<sup>アイトン</sup>そのものが、五元素になつていなさるんだよ。もしアートマンから出来ているとしたら、大地はどうしてこんなに固いのか——。あの御方の希望があれば、あらゆることが出来るんだ。血と精液から骨や筋肉ができるんだよ！海<sup>海</sup>の泡も何て固くなることだらうね！」（訳註、海の泡——海辺に落ちてゐるイカの甲のこと。イカの甲は海の泡が固まつたものと考えられていた）

〔在家生活をしていて覚<sup>ヴァイジュニヤーナ</sup>智<sup>ニヤーナ</sup>を得ることが出来るか？——修行が必要〕

「覚<sup>ヴァイジュニヤーナ</sup>智<sup>ニヤーナ</sup>を得てから世間で暮らすことも出来る。その場合は、あの御方こそが生物や世界になつていらつしやる、あの御方がなくては世界は存在しないのだ、ということを実感している。ラーマが智識を得て、『もう世間になど住みたくない』と言つたとき、父王ダシヤラタはヴァシシユタ賢者を彼のところにやつて説得させた。ヴァシシユタは、『ラーマ、もし世間が神なしに出来たというなら、捨ててもいいよ』と言つた。そしたらラーマは黙つてしまった。彼は、神なしには何一つ存在しないのだ、とはつきり知つた。結局、あの御方と世間を捨てることは出来なかつた。（プランクリシユナに向かっ

て)——つまり、ワミデキヤ明知の眼が要るんだよ。心が清まってくれば、その眼が具わってくる。クマリー・ブリンヤ処女礼拝を見る。どこにでもいる小便たれ小娘を、わたしは大実母マの顕現あらわれとして拜んでいたものさ。こつちには妻がいる。こつちには息子がいる。二人とも可愛いがっているが、異ちがったやり方だ。つまり、心の持ちようで何でも出来る、ということさ。清浄な心で一つの態度がきまる。その心が出来たら、世間において見神が出来る。だから、修行が必要なんだよ。

修行をしなくてはいけない。このことよく心得ておけ。男というものは女に安易やすぐに執着するものだということを、よく心得ておけ。女は生まれつき男を好きになるように出来ている。男は生まれつき女を好くように出来ている。だから、両方ともアツという間に墮おちちてしまうんだよ。

でも、世間暮らしにもなかなかいいところがあるさ。特に必要な場合は、妻といっしょに住んでもいいんだよ。アハハ……。校長、お前なぜ笑っているんだい？」

校長は心の中で独り言を言っていたのである——世間の人は、一度に何もかも捨てるなどということとはとても出来ないから、タクルルはこの程度にまで妥協してくださるんだな、と。十六アナのブラフマデヤリヤ禁欲を世間に期待するのは、全く不可能なのかな？ (訳註——十六アナ＝ルビー、つまり完全という意味)

ハタヨーギーが部屋に入ってきた。

パンチャババデ五聖樹の柱に一人のハタヨーギーが数日前から来ている。この人は牛乳を飲みアヘンを吸うだけで、ハタヨーギーをやっている穀物の類は一切食べない。アヘンと牛乳の費用が足りなかった。タクルルはパンチャババデ五聖樹の柱においでになったとき、このハタヨーギーと話をなされた。ハタヨーギーはラカールに、「私



のことを何とかして下さるように、バラマハンサジにお願ひして下さい」と頼んだのであった。タクルは、「カルカッタの旦那衆が来たら話してみるから——」とことづけておられたのである。

ハタヨーギー「(タクルに向かつて)私のことを、ラカールに何とおっしゃったのですか?」

聖ラーマクリシュナ「ああ、こう言っておいたよ。どの旦那かに頼んでみよう——。その、誰か——(プランクリシュナに向かつて)あんたたちは、こういう人をライク(好む)しないかい?」

プランクリシュナは黙ったままだった。

ハタヨーギーは出て行った。

タクルは話を進められた。

### 聖ラーマクリシュナと真実の言葉——神の人間活動を信ぜよ

聖ラーマクリシュナは、プランクリシュナはじめ信者たちに向かつて——「それから、世間で暮らしているなら、本当のことを言うようにできるだけ努力しなけりやいけないよ。正直、誠実でこそ、至聖さまがつかめるんだからね。わたしの場合、いまはちょっとゆるくなってきたが、以前はそりやあ大変なものだった。沐浴する」と言つたとすれば、ガンジス河に下りて行つて、マントラを唱えて、頭に少し水をかけて、それでもまだ何だかやり方が不十分だったんじゃないかと不安になったものだよ! 或る場所で小便しようときめると、どうしてもそこでしなければ気が済まなかった。カルカッタのラームの家に行ったとき、何かのハズミに、『ルチは食べない』と言つてしまった。さあ、食事

の席に坐つて腹が減っているのに、とにかくルチは食べないと言つたからにはルチは食べられない。仕方ないから、甘いお菓子で腹を満たしたよ（一同笑う）。

でも、今はその気持ちも少し緩ゆるくなった。『うんこをしに行く』とつい言つてしまつて、出そうもないのでラーム（原典註1）に相談した。ラームは、『したくなくなったのなら行くことはないですよ』と言つた。そのときよく考えてみた。すべてはナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）の顕れだ。だから、ラームもナーラーヤナだ。だから、あれの言うことをきかないという法があるうか？ 象もたしかにナーラーヤナだが、しかし、象使いもナーラーヤナ——象使いが象のそばに寄るなど言う時は、その言葉に従わない法があるだろうか？ こんなふうに分別判断してからは、<sup>々</sup>本当のことを言う<sup>々</sup> ことに對する熱心さは少しばかり緩ゆるくなつたよ」

〔以前の話し——ヴァイシュナヴァ・チャランに對する教訓——神の人間活動を信ぜよ〕

「今また、心境が変わつてきているようだよ。ずーっと前のことだが、ヴァイシュナヴァ・チャランが、『人間のなかに神を見るようになったとき、<sup>々</sup>完全な智慧を得たといえる』と言つた。いまわたしは、あの御方が人間一人一人の姿になつて歩き廻つていなさるのだ、とわかつた。サードゥウの姿になつたり、詐欺師の姿になつたり、時には悪者の姿になつたりして——。だから、サードゥウの姿をしたナー

（原典註1）ラーム——ラーダーカーンタ堂の司祭。

ラーヤナ、詐欺師の姿をしたナーラーヤナ、悪者の姿のナーラーヤナ、好色漢の姿をしたナーラーヤナというわけさ。

いまの気持ちは、どうやって皆にごはんを食べさせようかということだ。皆に、一人残らずに食べさせてあげたいんだよ。だから、一人ずつここに残しておいて食べさせるんだ」

ブランクリシユナ「(校長の方を向いて笑いながら) はっはっはっは、この人ったら！ (タクルの方を向いて) 先生、この人は舟から下るせといてお聞きにならなかつたんですよ」

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハッハ、アハハハハハ。何が起こつたんだい？」

ブランクリシユナ「いっしょに舟にお乗りになつたのです。ちよつと高い波が立つのを見て、下ろしてくれとおっしゃって——。(校長に向かって) どんなふうにして来られました？」

校長「(笑いながら) 歩いて——」

タクルは、またお笑いになった。

〔世間に住む人にとって世事を捨てるのは困難——学者と識別〕

ブランクリシユナ「(タクルに向かって) 先生！ 今度こそ私は仕事をやめようと思えます。仕事をしているかぎり、何もできません。(仲間の旦那衆を見て) この人に仕事を習ってもらつておりますので、私がやめたらこの人がしてくれるでしょう。もう辛抱ができなくなりました」

聖ラーマクリシユナ「そうかい、ほんとに厄介なものだね。今あなたにとっては、何日か静かなと

ところで独りになって、神のことを深く考えてみるのがとても大切なことだよ。あんたはたしかに仕事をやめたいと言っているが、キャプテンもそういうことを言っていたよ。世間の人たちは、口で言いはするがさっぱり実行しない。

智慧の言葉を語る学者はたくさんいる。口先で言うだけで何の役にも立っていない。ハゲタカみたいに空高く飛びはするが、目は墓穴の方をいつも見ている。つまり、女と金ばかりに注意して世間に執着し切っている。もし学者が識別ヅクウエーカと離欲ヅアイーライギヤを実行していると聞いたら、私は恐れ入るよ。そうでなかったら、犬か山羊のようなものだと思います」

ブランクリシュナは、タクールにお別れのあいさつをしてから校長に向かって言った。「あなた、どうなさいますか？」校長は、「いえ、皆さん方、どうぞお先に——」ブランクリシュナは笑ってまた言った。「もう二度といっしょに行くものか！ というわけですか」一同は大笑いした。

校長は五聖樹パシヤパサのあたりを少しぶらついてから、タクールがいつも沐浴をなさるガートに行つて沐浴した。それからバヴァタリニーとラーダーカーンタに詣つた。彼は思った——『自分は、神は無相であるど教わつてきたのに、なぜこの神像に礼拝するのだろうか？ タクール、聖ラーマクリシュナが形ある神や女神を信じていらつしやるので、そのためだろうか？ とにかく自分は、神に関して何も知らないし理解してもいけないのだ。あのタクールが信じていらつしやるのだから、この吹けば飛ぶような私が信じたっていいだろう！』

校長はバヴァタリニー（カーリー）をじっと見つめた。見ると、二本の左手に人間の生首と剣を持ち、

二本の右手で、恐れるなと印を結んでいる。一方では恐怖すべき御方であり、また一方では信者思いの大実母なのだ。二つの面の相乗なのである。信者にとっては——大実母に頼っている貧しく謙遜な生き物にとっては、この上なく慈悲深い！ この上なくやさしい！ しかし又、大実母は恐ろしい時(死)の女であることも真実だ！ 同時にこの二つの面を示すのはなぜか、それは大実母のみが知り給うことなのだ。

これについてのタクルの説明を、校長は思い出した。そしてこう思った——ケーシャブ・センはタクルのところまでカーリーを認めた、と聞いている。これがケーシャブがいつも言っていた、土の器にあらわれた霊、女神なのだらうか？

〔三昧の魂である聖ラーマクリシュナ、水差しや家のことを語る〕

やがて彼は、タクル、聖ラーマクリシュナのそばへ行つて坐つた。彼が沐浴をしてきたのを見て、タクルは彼に神前から下げてきた果物などを食べるようにと下さつた。彼は円ペランダに坐つてそれをいただいた。飲み水を入れた小型の水差しがペランダに置いてあつた。タクルのところに急いで戻り、部屋の中に坐ろうとするとタクルはおっしゃつた。

聖ラーマクリシュナ「水差し、持つてこなかつたのかい？」

校長「はあ。あの、持つて参ります」

聖ラーマクリシュナ「おい、おい！」

校長はドギマギして、あわててベランダに行き水差しを持ってきて部屋のなかに置いた。

校長の家はカルカッタにある。家庭内がどうも穏やかではないので、彼はシャームブルクに借家をしてきた。勤め先に近いところである。彼の家屋敷には父親と兄弟たちが住んでいる。タクールは「自分の家に戻って住め」とかねがね勧めておられる。大勢の家族のなかにいた方が神を想うのに都合がいいからとおっしゃるのだ。タクールがそういってお勧めになるのに、不幸にして彼はまだ自家に戻っていいなかった。今日タクールは、その話をまた持ち出された。

聖ラーマクリシュナ「どうだい、今度はお前、家に戻るんだらうね？」

校長「私は、どうしてもあの家に入ろうという気にならないのです」

聖ラーマクリシュナ「どうして？ お前のお父さんは家を壊して新しく建てかえようとしているのに——」

校長「家で苦勞が絶えなかったので——。どうしても行く気になりません」

聖ラーマクリシュナ「いったいお前、誰を恐れているんだい？」

校長「みんなが恐ろしいのです」

聖ラーマクリシュナ「(重々しい口調で) そりやお前、さつき舟に乗るのを怖がったようなものだよ！」

神殿では神々へのお供えが終わったようである。献灯アールラッティが始まってドラや鈴の音が聞こえてきた。カーリー殿は喜びに満ちあふれている。献灯アールラッティの楽器の音をきいて、乞食やサードウやファキール(イスラム

の遊行僧までみんな接待所にかき集まった。手に手にサーラ樹の葉や金属製の鉢や皿、水入れなどを  
 持っている。みんながお下がりをいただいた。今日は校長も救いの女神(カーリー女神)のお下がりをい  
 いただいた。

ケーシャブ・チャンドラ・センとナバビダイン新摂理協会——新摂理協会には本質が含まれている

タクルは神殿のお下がりを召し上がった後、しばらく休んでおられた。そのとき、ラーム、ギリ  
 ンドラをはじめ、数人の信者が到着した。信者たちは額めがずいてご挨拶ブラナムしてから、それぞれ席に着いた。

ケーシャブ・チャンドラ・センナバビダイン氏の新摂理協会のことから話は始まった。

ラームはタクルに向かつて——「先生、私はあのナバビダインは、ものの役に立ったとは思われ  
 ません。ケーシャブ氏もしホンモノなら、弟子たちのあのザマはどういうわけですか？ 私はあの  
 なかには何も無いと思いますね。割れた陶器のカケラを放り込んである部屋にカギをかけたようなも  
 のです。ガチャガチャ音がするので、人は中に金がザクザク入っているのかと思つていますが、  
 あにはからんや、中にあるのはガラクタだけ！ 外部の人には、中の様子がさっぱりわからないので  
 す」

聖ラーマクリシュナ「何か優れたいいものがあるに違いないね。そうでなければ、どうして大勢の  
 人がケーシャブをあんなに尊敬するんだろうね？ シヴァナートはなぜ人に認められないんだらう  
 ね？ 神様のお気持ちなしには、こういうことは一つも起こらないものだよ。」

しかし、世俗を捨てなければ、アーチャーヤム宗教家の仕事はできない。人びとが心服しないからね。皆はこう言うさ——『この俗物が！ 自分では女と金をこつそり楽しんでいくせに、神のみ実在、この世は無常の夢だなんて、我々に説教している！』一切を放棄した人でなければ、すべての人に受け容れられない。わずかの俗人どもは従っていくかも知れんがね。ケーシヤブは家庭をもっていたから当然のこと、家庭のことも考えた。家族を養っていかなくちゃならないからね。だから、あんなに講演レクチャーをしたんだ。でも、家庭は立派に整えていたよ。それにほら、あのムコさん！(訳註)(ケーシヤブの)屋敷のなかに入ると、大きな大きなベッドがいくつもあつて！ 世間で暮らしていると、ああいうものがだんだん集まってくる。楽しみの場なんだよ、世間というところは——」(訳註)——ケーシヤブは王族に娘を嫁がせた。

ラーム「あのベッド、遺産分配のときケーシヤブ・センがもらったものなんですよ。ケーシヤブの分け前だったのです。先生が何とおっしゃいましょうと、ヴィジヤイさんの話では、ケーシヤブ・センがこういうことをヴィジヤイさんにおっしゃったそうです。『自分はキリストとガウランガ(チャイタニヤ)の分身で、君は、いわばアドヴァイタ(チャイタニヤの弟子)だ』と。その上、何と言ったか御存じですか？ あなた様も新撰理協会の会員ですつて！」

タクルと信者一同は大笑いした。

聖ラーマクリシュナ「アツハハハハハ、ハハハハハ。知らんよ、そんなこと。わたしや、新撰理の意味さえわからないのにさ！」(二回大笑)



ラーム「ケーシャブの弟子たちが言いますには、智慧と信仰をはじめて調和させたのがケーシャブ氏だそうで——」

聖ラーマクリシュナは驚いて、

「何だつて？ アディヤートマ・ラーマ・ヤーナは、じゃ、どうなるんだい？ ナーラダはラーマを讃えてこう言いなすった。『おお、ラーマよ！ ヴエーダに至上梵パラブラフマンとあるのは、他ならぬあなたのことです。あなたは人の姿をして我々のそばに居られる。あなたは人間の姿に見えるが、本当は人間ではない。かの至上梵パラブラフマンである！』ラーマは答えなすった。『ナーラダ！ 私はとても満足だ。願いごとを叶えてあげよう』ナーラダはおっしゃった。『ラーマ！ 今さら何の願いごとがありましょう？ あなたの蓮華の御足に対する純粋な信仰を授けていただきたい。それから、あなたの世にも美しいマヤーに迷わされないようにしていただきたい』アディヤートマ・ラーマ・ヤーナは、ただもう智慧と信仰のことばかりが書いてあるんだよ」

ケーシャブの弟子、アムリタの話が出た。

ラーム「アムリタ氏は変わりましたね！」

聖ラーマクリシュナ「うん、この前来たとき、だいぶ体の具合が悪そうだった」

ラーム「先生！ 講演レクチャーの話をお聞き下さい。太鼓を打ち鳴らすといつしよに、『ケーシャブ万歳！』と皆が叫ぶのです。あなた様は、ダルダール（ダール 宗派）はよほど水溜りに生えるとおっしゃいましたね。それで、ある日のレクチャーでアムリタ氏はこんなこと言いましたよ。『あるサードウサードウ（聖ラーマクリシュ

ナがダルはよじんだ水溜りに生えると言われた。しかし兄弟よ、ダルは要る。ダルは必要であると思いませんか？ まったくのところ、正直なところ、ダル(宗派)は必要なであります！」(一同笑う)

聖ラーマクリシユナ「何とまあ！ チェッ！ チェッ！ チェッ！ 何てレクチャーだ！」  
褒められるのを好む人がいる、という話しになった。

聖ラーマクリシユナ「ニマイ・サンニヤーサ(聖チャイタニヤの出家)という劇があるので、ケーシャブのところはわたしを連れて行ってくれた。その日の劇を見てみると、ケーシャブとプラタブを、ある人がガウルとニタイの二人にたとえていたので、プラサンナがわたしに質問したよ。『じゃ、あなた様は何に当たるのでしょうか？』って。見るとケーシャブは、わたしが何て答えるのかと思って耳をそばだてていた。わたしは言ったよ。『わたしは、お前たちの召使いのそのまた下男、ゴミにくっついたホコリさ』ケーシャブは笑いながら、『この方はつかみどころがない』と言っていたっけ」

ラーム「ケーシャブは時々言っておられました。あなた様は洗礼者ヨハネだと——」

一人の信者「それから、時々こうもおっしゃいました。あなた様は十九世紀のチャイタニヤである  
と——」  
Nineteenth Century

聖ラーマクリシユナ「そりゃ、どういう意味なんだろう？」

信者「イギリス式の数え方でいうと十九世紀である現代に、チャイタニヤ様デレツアが再誕なさった。それがあなた様ということでございます」

聖ラーマクリシユナは虚ろな様子で——「それがどうした。それより、この腕がどうすれば良くな

るのか教えてくれないか？ 今考えていることは、どうすれば腕が治るかということだけだよ！」  
トライローキヤの歌の話になった。トライローキヤはケーシヤブのブラフマ協会で神を讃えるキールタンを歌っている。

聖ラーマクリシュナ「アハ！ トライローキヤのすばらしい歌！」

ラーム「どうでしょう。満点でしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「アア、満点だよ。そうでなけりや、どうしてこんなに心が惹かれるものか」  
ラーム「みんな、あなた様のご心境を真似て歌につくるのです、ケーシヤブ・センが礼拝式するとき、あなた様の思想をお話しになる。それをトライローキヤ氏があのような歌に作るのです。これ、ご覧なさい、この歌——

愛の市場に喜びは集まり

ハリはその信者たちと共に

法悦に浸り楽しくあそぶ

あなた様が信者たちと楽しくやっつけていらっしやるのを見て、こういう歌をつくったのです」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハ、苛つかせるんじゃないよ。\*\*\*またわたしを巻添えにするつもりかい？」(一同笑う)(訳註——コタムリトのベンガル語原典には何か所か「\*\*\*」で記載された箇所があり、

これはマヘンドラグプタがあえて記述しなかった内容で、一般には公開したくなかった内容のようである)

ギリンドラ「ブラフマ協会の連中は、バラマハンサ・デトワ大覚者様は組織能力がない」と言っております」

聖ラーマクリシユナ「そりゃ、どういう意味だい？」  
unpublished in English

校長「あなた様は宗教団体を指導する方法をご存知ない、知性が足りない、とこういう意味でございます」(一同笑う)

聖ラーマクリシユナ(ラームに向かって)「じゃあ、言ってみろ、わたしの腕がなぜ折れたか。お前、このことについて一場の講演レクチャーをしてみろ」(一同笑う)

〔ブラフマ協会とヴィシユヌ派信者とシャクティ派信者の宗派根性に関する教訓〕

「ブラフマ協会の連中は、グ神は無形だ、神は無相だグと言う。それもいいさ。真心を込めてあの御方を呼びさえすればいいんだ。心の底から熱心になれば、内なる導き手アンタルヤミーンである神は必ず知らせて下さるよ——ご自分の真の相すがたをね。

だが、これがよくない——私の考えていることは正しいが、他の人の考えは皆間違っていると。自分たちが神は無形だと言っているんだから、神は無形であつて形がある筈はない。我々は神が有形

(原典註2) 数十年前、タクールは転んで腕を折ってしまい、長い間副木を当てて包帯しておられた。当日もまだ包帯がとれていない。

だと信じている。従つて神は形相のあるのが本当で、無形の神などというものはない。そもそも人間が、神はコレだ、コウいうものだ、なんて決めることが出来るかい？　こういうのがヴィシユヌ派とシヤクテイ派の間にある反目、悪感情なんだよ。ヴィシユヌ派は、われらのケーシヤブ(クリシユナ)と言ふ。——シヤクテイ派は、われらのバガヴァティー(カーリー)だけが唯一の救世主だと言ひ張る。いつかわたしは、ヴァイシユナヴァ・チャランをシエジヨさん(マトゥール氏)のところへ連れて行つた。ヴァイシユナヴァ・チャランは離欲の精神も強いし大へんな学者だが、カチカチのヴィシユヌ派信徒だ。片やシエジヨ旦那(バブ)はバガヴァティー(大実母カーリー)の信者。なごやかに話が進んでいたんだが、何かの拍子にヴァイシユナヴァ・チャランが、『解脱させて下さる御方はケーシヤブ(クリシユナ)ただお一人です』と口をすべらせてしまった。それを聞くが早いかシエジヨさんの顔は真つ赤になり、『この、ロクでなし！』と口走つてしまった(一同笑う)。シヤクテイ派だからね。言いそうなことだろう？　わたしはヴァイシユナヴァ・チャランの横ッ腹を突つついてやつたよ。

宗教のことで、あつちの人と口論したり、こつちの人とケンカしたりしている人間がいる。ヒンドゥー教徒とイスラム教徒。ヒンドゥーの中ではシヤクテイ派、ヴィシユヌ派、シヴァ派、ブラフマ協会という新手、みんな互いにイガミあつてゐる。分かつちやいなんだよ。クリシユナと呼ばれてゐる御方が同時にシヴァであり、アドイシャクテイ根元造化力であり、また同じくイエスであり、アッラーなんだよ。一人のラーマに千もの名前があるんだ。

本体は一つ、名前はさまざま。皆は一つのものを求めているんだよ。だが、場所がちがひ、器がちが

い、名前がちがう。一つの池にたくさんのお水汲場があるだろう。ヒンドゥー教徒は或る場所から水を汲んで水がめに入れてジャルと呼び、イスラム教徒は別なガートから水を汲んで皮袋に入れてパーニーと呼び、キリスト教徒はまた別なガートから汲んでウォーターと呼ぶ（一同笑う）。

もし互いに、『イヤ、この品物はジャルじゃない、パーニーだ』『何でパーニーなんぞであるものか、ウォーターだよ』『そうじゃない、ジャルだよ』——なんて言い合いをしたら笑い話じゃないか。これが宗教、宗派間の争い、意見のちがいが、ケンカだよ。宗教のために殴りあったり、殺しあったり、戦争したり、愚かなことだね。どの宗派の人もみんな、あの御方への道を進んでいるんだ。誠実で、神を熱愛していれば誰でも、あの御方をつかむことが出来るんだよ。

（校長に向かつて）——お前、これをよく聞いておけ。ヴェーダ、プラーナ、タントラ——すべての聖典は、あの御方に向かつて祈り、求めているんだよ。ほかの誰も求めちゃいないよ。あの一なるサッチダーナダだ。『ヴェーダ』でサッチダーナダ・ブラフマンと呼ぶ御方を、『タントラ』ではサッチダーナダ・シヴァといい、その同じ御方を『プラーナ』では、サッチダーナダ・クリシユナと呼んでいるんだ」

聖ラーマクリシユナは、ルームが自分の家で時々、自分で料理を作って食べているという話を聞いておられた。それで、モニ（校長）に向かつてお聞きになる——

聖ラーマクリシユナ「お前も、自分でつくって食べることがあるのかい？」

モニ「いえ、私はいたしません」

聖ラーマクリシュナ「あのね、ギーを少し添えて食べてごらん。体も心もスガスガしくなるよ」(訳註、ギー——牛乳を発酵させて作ったバター。独特の香ばしい風味がある)

### 父は法なり、父は天なり、父は最上の行なり

ラームの家庭内のことで長い話になった。ラームの父親は熱心なヴィシュヌ派の信者で、家で毎日、<sup>シュリ</sup>聖ダラ(クリシュナの一名を拝んでいる。ラームが幼い頃、父親は再婚した。そして、継母ともどもラームの家にいっしょに住んでいる。しかし、ラームは継母と同じ家では幸せではなかった。その継母は現在四十才であるが、彼女のためにラームと父親の間にわだかまりがあった。今日はそんな話も出た。

ラーム「父は、ほんとにダメになってしまいました！」

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて)——聞いたかい? お父さんはダメになってしまったとさ! そして息子のこの人はうまくいっている!」

ラーム「あの人(継母)が来たから、家が平安ではなくなった! 年中何かイザコザが起こるんですからね! 私たちの家庭は壊れかかっているんです。だから私は、あの方は自分のお父さんの家に住んだらどうかと言っているのですがねえ……」

ギリンドラ「(ラームに向かつて)——じゃ、君の奥さんも実家においておき給えよ!」(一同笑う)

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハ。一つの水がめだろ、夫婦は? 瓶<sup>かめ</sup>をこっちにおいて、フタを別の場所におくのかい? シヴァはこっち、シャクテイ(シヴァ妃カーリー)はあっち!」

ラーム「先生！ 私たちは楽しく暮らしているんですよ。あの人が来たら、家庭がメチャクチャになるんです」

聖ラーマクリシュナ「フーン。じゃ、お父さん夫婦を別居させてあげるのも一つの方法だね。月々ちゃんと生活費を送ってさ。父親と母親は偉大な師グなんだよ！ ラカールが、『お父さんの皿グのものを食べてもいいでしょうか？』とわたしに聞いたから、わたしはこう答えた——『それがどうしたい？ お前は、お父さんの皿からモノを食べないんだって？』

とは言うものの、きちんとした人は、自分の残りものを誰にも食べさせないがね。食べ残しを犬にもやらないほどだ」

〔グルを理想神イシユタとして拝む——品行が悪くとも師を捨ててはいけない〕

ギリンドラ「先生！ もし両親が極悪非道なことをしている場合は？」

聖ラーマクリシュナ「かまわないさ。母親が姦通したとしても見捨てちゃいけない。ある家族が、自分たちの師匠グの妻の品行がよくないというので、その人の息子の方をグルにしようとした。わたしはそれを聞いて、こう言ったよ——『何てことをする！ 根を捨てて若芽だけをとる気か？ 墮落したからって、それがどうした。お前はあの方を理想神イシユタと思うべきだ』

たとえば居酒屋に通うとしても



それでもあの人は私のグルよ

わたしの尊き御方 永遠の喜び」

〔チャイタニヤ様と母上——人間の義務〕

「お母さんやお父さんはつまらぬ存在かい？ 両親が喜ばないなら、宗教もヘチマもあるものか。チャイタニヤ様は初めのころ、神への熱愛で気狂いのような有様だったが、それでも出家するに先だつて、何日もかけてお母さんの承諾を得なすつた。『お母さん！ ときどき会いに来ますから』と言つて——。（校長に向かつて叱るような口調で）——それから、お前によく言つておくがね、お父さんとお母さんに立派に大きくしてもらつて、何人もの子供まで持つ身になつてゐるのに、お前は女房をつれて家を出てゐる！ お父さんとお母さんを粗末にして、女房子供をつれて家を出て、それで熱烈な神の信者ツラをしている。お前のお父さんは生活に不自由がないからいいよなもの、そうでなかつたらわたしは、恥知らず！ とどやしつけているところだ」

部屋の中の全員がシーンとなつてしまつた。

聖ラーマクリシュナ「人間には払わなきやならない負債があるんだよ。家の祭神に対する借り、聖者たちに対する借り、母親からの借り、父親からの借り、それから妻に対する借り。母さん父さんからの借りを返すまでは、何をやっても成功しない。

女房に対しても借りがある。ハリシユは女房をうつつちゃつておいて此処に来て住んでゐる。もし女

房がちゃんと食べられるようにして来なかったなら、言っただろうよ——『このひきょう者のロクデナシ！』

智識を得たあとは、その自分の女房を大実母ママの表現あらわれだと見るようになる。チャンディー（大実母カーリーをたたえる書）には、（原典註3）すべての生物の中に母として住みたもうその女神！とある。あの御方がお母さんになっていなさるんだよ。お前たちに見える女という女はすべて、あの御方なんだよ。だからわたしは、女中のプリンデ（原典註3）に対しても文句を言うことができない。聖典にある詩などをベラベラ暗誦したりして偉そうなことを言う連中も、行いとなると全く別だ。ラームプラサンナ（原典註4）はあのハタヨーギーにアヘンと牛乳を調達してやったり、そんなようなことばかりして歩く。そして『マヌの法典』に、（原典註3）修行者に奉仕せよと書いてあるから、なんてこと言っている。そのくせ、年とつた母親は食べものも充分でない。年寄りが自分で市場まで買いに行っている。腹の立つ話だよ」

〔すべての負債かから解放されるのは誰？ サンニヤーシンと義務〕

「でも、ひとつ話がある。神ブレマの愛に酔ってしまった人にとっては、いったい誰が父親だろうか？ 誰

（原典註3） プリンデー—タクル付きの女中、ベンガル暦二二八四年アシャル月十二日、キリスト暦一八七七年六月二十五日からその任に着いた。

（原典註4） ラームプラサンナ—アーリアダハに住んでいたタクルの信者、故クリシュナキシヨルの息子。

が母親だろうか？ 誰が妻だろうか？ 神様を気狂いのようになって愛しているんだ！ 彼にはもう義務がない。すべての負債かりから解放されるんだよ。この狂気とはどんなものか——こういう境地になると、この世界のことなんか忘れてしまう。この世界で一番可愛くて馴染の深い自分の肉体のことまで忘れてしまうんだよ！ チャイタニヤ様デレツアがそうだった。海を海とも知らず飛び込んでしまいなすつたし、大地に何度も何度も体を叩きつけたりもなすつた。飢えも、渴きも、眠けもなかった。肉体があるとも感じていなかった」

〔兄プロ・ゴパール(原典注5)の聖地詣り——タクールが此処ここにいるのに何故なぜ聖地巡礼？——アダルの招待——傷ついたラームの自尊心——タクールの仲介〕

タクールは、「ハー、チャイタニヤ！」と叫んで立ち上がった。信者たちに向かっておっしゃる——「チャイタニヤは完全無欠な意識という意味だ。ヴァイシユナヴァ・チャランはよく言っていたよ。」

——『ガウランガは、この完全無欠な意識から湧き上がってくる一つの泡だ』と

聖ラーマクリシュナ「お前、もうすぐ聖地巡礼に行くのかい？」

兄プロ・ゴパール「はい。すこし廻まわってまいります」

ラーム「兄プロ・ゴパールに向かつて——この方(タクールのこと)は、ヴァフダカの後でクティチャカになるとおっしゃいますよ。あちこち沢山の聖地を廻まわって歩くサードゥをヴァフダカと言います。巡礼したいという気持ちが静まって、一つの場所に落ち着いて坐まっているようにになるとクティチャカと

呼ばれるそうですよ！

それから、こういう例え話をして下さったのです。一羽の鳥が船のマストの上に止まっていた。船がガンジス河からインド洋に出たのに気がつかなかった。やっと気がついて陸を探すため北の方に向かって飛んで行った。どこまで行っても陸地が見当らないので戻ってきた。すこし休んで南の方に飛んでみた。そっちの方にも陸地は見えなかった。ハアハア言いながらまた戻ってきた。少し休んで今度は東の方と西の方に行ってみた。どっちにも陸地は見当らなかった。それからはマストの上に黙って止まっていた、ということですよ」

聖ラーマクリシュナ「(兄・ゴパールと信者たちに向かつて)——神様はアツチだ、アツチだと思つてゐる時は無智だ。ココだ、ココだと感じるのが智識だよ。

一人の男がタバコを吸いたいと思つて隣の家に火を借りに行つた。夜が更けていた。隣の家ではみんな眠つていた。さんざ戸を叩いた後で、誰か一人戸を開けて出てきた。外の男を見て、『何ですか、どうしたんですか?』と聞いた。男は、『どうしたつていうことはないでしょう。私がタバコ中毒だつてこと知つてゐるくせに——。火種をもらいに来たんですよ』すると、その人は言った。『ヤレヤレ、あなたはお目出たい人だね！ 暗いところ苦勞してやつてきて、戸をドンドン叩いたりして！ あんた

(原典註5)ゴパール(兄)——シンティに住んでいたタクルの出家した弟子の一人。後のスワミ・アドヴァイターナンダ。タクルはプロ(年長の、大きい)ゴパールと呼んでおられた。

は自分の手に、火のついたランタンを持っていないか!」(一同笑う)

探しているものはすぐそばにある。それなのに人はいろんな場所を探し歩く」

タクールは、「あの御方は此処いきみに活身いきみで存在しているのに、何のための聖地巡礼か?」ということ  
を暗示されたのであろうか?

ラーム「先生! 今このことがわかりました。グルがどうしてある弟子たちに四大聖地を廻ってこ  
いと命じられるのか——。一度廻ってみれば、ここもあそこも同じだということがわかって、グルの  
許もとに戻ってきます。これはただ、グルの言葉を信頼させるためなのですね」

話が一段落すると、タクールはラームの美点をあげてお誉めになった。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて)——アハー、ラームはほんとにいい性質だよ! 大勢  
の信者たちにサービスしたり援助したりしている。(ラームに向かつて) アダルが言ってたよ、お前  
がとても親切にしてくるって!」

アダルはシヨババザールに家がある。タクールの熱心な信者である。彼の家でチャンディーの歌を  
うたう会が催された。タクールと信者たち大勢が出席した。ところが、アダルはラームを招待するの  
を度忘れしてしまった。ラームは大そう自尊心の強い人なので、友人たちに不満を洩らしていた。そ  
れでアダルはラームの家に行つて、忘れていた非礼を詫わびたのであった。

ラーム「あれはアダルの責任ではなくて、ラカールの責任だったということがわかりました。ラカ  
ールが私に知らせるように頼まれていたのに——」

聖ラーマクリシュナ「ラカールを責めるな。喉のどを押すとオッパイが出てくるような、ホンの子供なんだから——」

ラーム「先生！ 何をおっしゃいますか。こともあるうにチャンデーの歌の催しだったというのに——」

聖ラーマクリシュナ「アダルが気が付かなかったんだよ。ほら、いつかジャドウ・マリツクの家にわたしといっしょに行つたんだよ。帰りがけに、『お前、シンハヴァーヒニー（ライオンに乗った大実母の姿）にお布施をしなかったのかい？』と聞いたたら、彼は、『先生！ お布施をするものだということ』を、私はちつとも知りませんでした』と言つたよ。

彼が声をかけなかったとしても、神かみの名を唱えるのに何の差し支えもないだろう？ 神の名を讃える場所には、誘われなくとも行くものだ。招待の必要はないんだよ」